

致道館の遺構

創建当時の面積の半分以下にあたる約7千平方メートルの敷地には、現在においても以下のものが残されています。

また、講堂の東側には、養老堂をはじめ現存しない校舎の主要な部分について、昭和58年の発掘調査に基づき当時の建物の間取りを平面的に表示しています。

1 聖廟 (せいびょう)

毎年2月と8月に、儒学の祖である孔子を祭る釈奠(せきてん)が行われた所です。

釈奠では聖廟に聖像が飾られました。聖像の筆者と年代はともに不詳ですが、聖人の風格が偲ばれる名筆といわれています。



聖像〈県指定有形文化財〉
(致道博物館蔵)

2 講堂 (こうどう)



始業式などの時に生徒はここに集まりました。また、藩主が参勤で留守の年には、2日おきに役所として用いられ、藩役人が集まって藩政の打ち合わせや会議が行われました。

3 御入間 (おいりのま)

藩主がお成りの時にお入りになった所です。全4部屋のうち、特に御居間(おいま)の天井と床下は、賊の侵入を防ぐようになっています。



御居間の内部

4 表御門 (おもてごもん)

藩主がお成りの時に使われた門です。

5 西御門 (にしごもん)

教職員や藩役人が出入りした門です。

6 東御門 (ひがしごもん)

生徒が出入りした門です。



当時の間取りの平面表示

【開館時間】 9:00～16:30

【休館日】 毎週水曜日、12月29日～1月3日
(水曜休日の場合は翌日以降の平日)

【入館料】 無料

【お問合せ先】

史跡旧致道館 管理事務室

〒997-0035 山形県鶴岡市馬場町11-45

電話・FAX: (0235) 23-4672

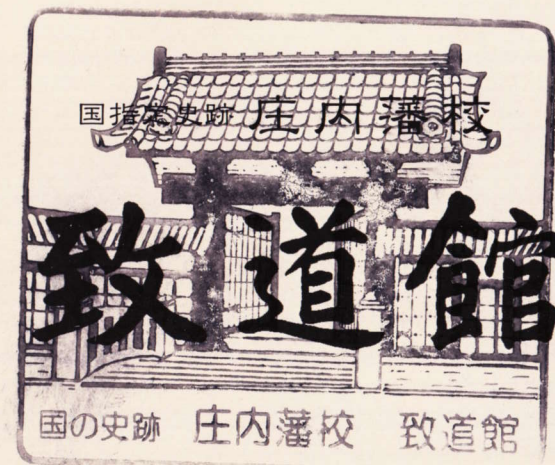
【指定管理者】

公益財団法人 致道博物館

〒997-0036 山形県鶴岡市家中新町10-18

電話: (0235) 22-1199

FAX: (0235) 22-3531



表御門

ちどうかん
致道館の名称は、論語の一節

「君子学^{くんし}ンデ以^{もつ}テソノ道^{みち}ヲ致^{いた}ス」に由来します。

200年の風雪に耐えて市の中心地に建つ致道館は、
当地の歴史と文化的風土を静かに物語ります。

鶴岡市教育委員会

致道館の沿革

致道館は、庄内藩酒井家9代忠徳(ただあり)が退廃した士風を刷新して藩政の振興を図るために文化2年(1805)に創設した学校です。

当初は現在の鶴岡駅前通りにありましたが、政教一致の趣旨から文化13年(1816)10代忠器(ただかた)によって鶴ヶ岡城三の丸内に位置する現在地へ移されました。約1万5千平方メートルの広大な敷地には、現存する建物のほかに神庫や養老堂、句読所をはじめ舎生の寄宿する本舎などの学舎が建てられ、武術稽古所、さらには矢場や馬場までありました。

明治6年(1873)の廃校に至るまでのおよそ70年間、致道館は荻生徂徠(おぎゅうそらい)の学風を伝承し、且つ孝悌忠信を重んじて武士道を体得し、互いに切磋琢磨して多くの人材を輩出しました。

その後、時代とともに鶴岡県庁舎、鶴岡警察署、朝陽第一・第二尋常小学校などへの変遷を経て、昭和26年(1951)に国の史跡に指定され、昭和40年(1965)から保存修理に着手し、昭和47年(1972)から一般公開しています。

致道館の教育

学 制

- ① 句読所(くとうしょ=今の小学校にあたる)
- ② 終日詰(しゅうじつづめ=今の中学校にあたる)
- ③ 外 舎(がいしゃ=今の高等学校にあたる)
- ④ 試舎生(ししゃせい=今の大学教養課程にあたる)
- ⑤ 舎 生(しゃせい=今の大学学部か大学院にあたる)

の5段階に分かれ、年1~4回の学業検閲に合格すれば、年齢や修学年数に関係なく順次進級しました。

句読所には担任の教師がつかますが、終日詰以上は自学自習と会業(かいぎょう)と呼ばれる小集団討議が中心でした。会業は、助教(じょきょう)を会頭とし、課題と期日を定めて研修の成果を個人ごとに発表し、互いに討論して疑問を明らかにしながら理解を深めようとする学習方法です。

数え年10歳で入学する句読所から、30歳前後になる舎生まで合わせると、生徒の数は350名くらいに達したといえます。

学 風

寛政異学の禁(1790)の後、諸藩が幕府の方針に従い朱子学を藩学とする中で、庄内藩は荻生徂徠の提唱する徂徠学を教学とし、廃校までこれを堅持しました。

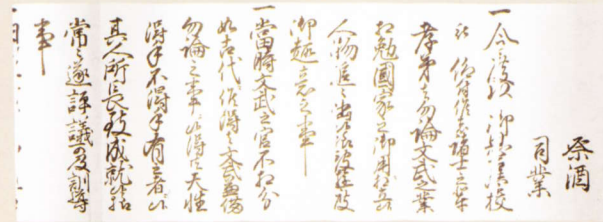
致道館教育の特色は「天性重視・個性伸長」と「自学自習」、「会業の重視」にあります。生徒一人ひとりの生まれつきの個性に応じてその才能を伸ばすことを基本にしながら、知識を詰め込むことではなく、自ら考え学ぶ意識を高めることを重んじたのは、すべて徂徠学思想に基づくものです。

こうした教育方針は、当地の教育的風土を形づくるとともに時代を超えて変わらぬ学びの精神として受け継がれ、今なお本市の教育の根幹をなしています。

教育に関する被仰出書

藩主忠徳は、致道館の開校にあたり教職員を任命する際に、自らの意向を示した趣意書である「被仰出書」を与えました。校長にあたる祭酒(さいしゅ)と、副校長または教頭にあたる司業(しぎょう)には教育の目的や基本的な教育方法を、さらに職掌別に管理や指導上の留意点などを事細かに書き記しています。

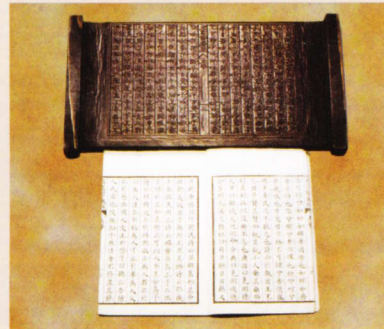
この中で、致道館教育の目的は「国家の御用に立つ人物」、「人情に達し時務を知る人物」の育成にあると述べています。



(致道博物館蔵)

版木〈県指定有形文化財〉・致道館本

致道館で編集印刷した教科書とその版木です。論語・詩経・書経・大学・中庸などの版木が全部で317枚あり、1枚の欠損もなく保存されている全国的にも貴重な資料です。



(致道博物館蔵)

致道館と徂徠学

徂徠学は古文辞学(こぶんじがく)ともいわれ、古い辞句や文章を直接読むことによって、後世の註釈にとらわれずに孔子の教えを直接研究しようとする学問です。

庄内藩における徂徠学の元祖は水野元朗(みずのげんろう)と疋田進修(ひきたしんしゅう)です。特に、徂徠の没後に太宰春台にも学んだ元朗は、庄内藩学の基礎をつくりました。

以後、藩の多くの儒者が江戸在職中に徂徠の門に学んだことから、この学風は広く藩内に普及しました。

また、後に初代祭酒に任命される白井矢太夫(しらいやだゆう)が、徂徠学で培った抜群の見識をもって寛政の藩政改革に大きな功績を挙げたことから、藩主忠徳は矢太夫を深く信頼するとともに、徂徠学が実際に藩の政治に役立つ学問であることを高く評価しました。

こうした経緯と、徂徠学を学んだ人材が藩の指導的な立場にあったことが、徂徠学を藩学とした要因であるといわれています。



荻生徂徠画像(致道博物館蔵)

荻生徂徠(1666~1728)

江戸時代中期の儒学者。古文辞学を確立。

私塾を開き、太宰春台や服部南郭らの門人を輩出しました。また、5代將軍綱吉の側用人の柳沢吉保や8代將軍吉宗の政治的助言者でもありました。

徂徠先生答問書 4巻

水野元朗と疋田進修の質問に、徂徠が答えた直筆の書簡です。中には、徂徠がその書簡に朱書をもって答え、返したのものもあります。

水野・疋田両者の学問を究めようとする真剣な姿勢や、徂徠の真摯な指導のうかがえる貴重な資料です。



(致道博物館蔵)